

「まめやかさ」に徹する保育者の仕事

矢萩恭子

保育者になりたてのころ

実際に保育の場に身を置いてみて驚いたことは、まず、その想像以上の激務であった。養成校の教員となつてから、保育者をめざす学生たちに何度も白状してきたことだが、当時の自分は、とにかく最初の二年を無事に越すことを目標に過ごしていた。園生活に入った途端、元来それほど病弱ではなかつたはずの自分の健康が全くコントロールできなくなつた。しょっちゅう風邪を引き、だいたい治つたかと思つても、咳だけがいつまでも続いて、緊張を要す

る場面になると発作のように咳が出た。「三年目もこのままの状態が続くようなら自分は保育者には向かないということに違いない」と、覚悟を決めて三年目の春を迎えたことを思い出す。

激務といつても、肉体労働ばかりでなく、めまぐるしく動かしている意識の精神的緊張からくる疲れもあつた。朝の保育室の準備から、園バスへの添乗業務、戻るとそのまますぐに保育に入り、子どもたちの降園まで一瞬たりともものんびりと腰を降ろしてゐるような余裕はなく、降園後は、再び園バスの添乗か、保育室や園舎・園庭の清掃、保護者との個別

連絡、打ち合わせや反省・会議、園内の業務分掌に応じた係の仕事などが続く。やっと自分の保育室へ戻ってその日の保育の名残を一つひとつ手にとつて確かめ、明日の保育へつなげるための教材や環境の準備に入ることができるのは、夕方遅くであるのが常であった。これが、行事を控えていれば、さらに時間は遅くなった。

ようやく自分の保育室へ戻ると、身内に残る身体感覚を頼りに、夢中で過ごした保育中の記憶一つひとつを心に呼び覚まして保育室のあちらこちらに目をやり、順番に子どもたちに思いを戻していく。こうして再びその日の子どもたちと対面できる時間は、全身を覆う疲労感にも負けず、楽しく濃厚なひとときでもあったが、そうするゆとりがもてたのはまだしばらく先のことであった。

先輩保育者からの助言

周囲への視野を忘れず、常に「こちらとあちら」

「今とその先」「この子と全体」に気を配り、次々と切れ目なく流れていく保育の一日は、慣れないうちは決して滑らかなには流れず、職員室との無駄な往復や、保育室と園庭との不必要な移動や、反対に必要な場所や場面に的確に位置できない不在や時間的空白を含み込みながら、不器用に流れていった。

「あなたは動きすぎる」——それは、一方的な批判ではなく、もう少し子どもの動きや表情に目を留め、子どもとのやりとりを楽しんで過ごすようにという助言であったのだが——この先輩保育者の言葉が痛いほど身に染みながら、一方で、三歳児の中でも特に動きや要求の激しい人たちに振り回され、他方で、全体を把握しなければという焦りに突き動かされ、心身に力が入り過ぎていたことからくる疲労感も大きかった。

しかし、別の先輩保育者からは、こまねズミのように動き回り、三歳児の世話をする個々の動作の一つひとつが決して無駄な行為ではないことを教えら

れた。たとえば、投げ出された靴をその都度そろえておくことや、小さな足に左右の靴下を探してきて履かせること、園に慣れるまではそれこそ一回一回トイレに付き添い、ペーパーの取り方から水の流し方、手の洗いや、ハンカチの取り出し方を手伝うこと、泥で汚れた足を外の流し脇のタライできれいにし、用意しておいた足拭きマットへ促したり、抱きかかえたりすること、流れ出ている鼻水を拭くこと、

砂場遊びの際に袖口をまくること、散乱したおもちゃや使わずに打ちやられた遊具を、その都度端に寄せたり、片づけたりすること、子どもたちの活動状況に応じて材料や用具を用意し直すこと……などなど、いまその時、目の前にあることに一つひとつついでいねいに向き合い、対応していくことで保育者の一日は明け暮れる。

「今日は天気がいよいよか、子どもたちは陽光に誘われ、次々と園庭に出て行つては砂場を訪れ、土や水や風と心ゆくまで戯れている」というような時で

も、その先にある昼食、その前における着替え、そのための環境準備、それらに伴う時間的流れの予測へと意識を向け、他方では、室内に残り、自分自身を求める活動にたどり着くまでの「模索の時間」あるいは、「過程としての時間」を過ごしている人、気持ち安定するまで時間がかかっている人などに細やかに配慮したり、かかわったりする。

「驚く心」と「まめやかさ」

倉橋惣三は、『育ての心』^{註2}において、適当な環境のもと、その子らしく伸びていこうとする力がさまざまに発揮される様相を感じとる大人側の心を「驚く心」と呼ぶ。子どもを理解する上で欠かせないこの「驚く心」とは、子どものすぐ傍らにいて、その子らしさやそのよさを敏感に感じとり、ありのままに感動し、受け止める心の動きであろう。しかしまた、この「驚く心」をもってしても、日々のこまごまとした仕事に誠実に向かう保育者の細かい心遣

い、行き届いた実際的な気配りである「まめやかさ」なくしては、「教育」にはならないという。つまり、子ども理解は、感受することに留まるだけでは理解とは呼べず、受け止め、感じとったその先を見通して、いま目の前のこの子どもに対して、具体的な実際的な手立てを施すことができて初めて、子ども理解と呼べるということではなからうか。

確かに、着替えを手伝ったり、お弁当のしたくや帰りの身じたくを見たりする一つひとつにおいて、保育者の個々の子どもに対するとらえ方が、微妙に反映されていく。どの子どもにも一見同じような援助やかかわりがなされているように見えても、実はその具体においては、働きかけるタイミング、援助と援助の間の取り方や声のかけ方、距離の置き方、全体の中での順番等々に対して働いている保育者の意識があり、意図がある。そして同時に、このように、身体に触れ、視線を交わし、言葉をかけるといふ毎日毎日の営みを通じて、無数に積み重ねられる

やりとりの中から、子どもと保育者相互に情動的で精神的な結びつきを成り立たせずにはおかない関係性の絆が燃り上げられていくのである。これを、単純に「信頼関係」と呼んでしまうには空疎な感が漂うほどであり、それは簡単に有無を問えるようなものではなく、互いに「いつの間にか」相手の存在が、かけがえのないものになっていく関係である。周知のように倉橋は、この保育者の「教育」の仕事や園芸における園丁の働きに例えている。子どもを元来、自分自身で伸びていく力をもっている自然の種子となぞらえて、それに花や実をもたらすために、「うるおい」を与え、自然に逆らわず、成長を強制・矯正せず、一つの花も枯らすことなく、ために「限りない心づくし」^{注3}を実践するのが園丁（教育）の仕事である。言うまでもなく、幼稚園の創始者であるF. フレーベルが栽培の原理を教育の原理とし、その名称を、「庭」のイメージから「幼稚園」としてブランケンブルグに開いた考えに所以する。^{注4}

「まめやかさ」に見る養護と教育の不分離

ところで、「まめやかさ」の具体的内容を考える時に思い浮かぶことは、『保育所保育指針』で保育所保育の特性であるとされる「養護と教育」という考え方である。平成二十年三月に改定告示された指針（注）の第三章「保育の内容」では、「子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わり」である養護と、「子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助」である教育が、「子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開される」こと、すなわち「養護と教育が一体となって展開される」ことに留意する点が明確に強調されている。この子どもの健康や安全、安定にかかわる内容を実践するために、保育者がこまごまと絶えず心がけることこそ「まめやかさ」の具体的内容であり、同時に、五領域から構成される「教育に関わるねらい及

び内容」を実践する上でも「まめやかさ」を具体的に発揮する必要性が、この「一体」という用語には表されている。つまり、「まめやかさ」を子どもたちの中にいる保育者の教育者としての要諦であるとした倉橋においては、すでに養護と教育との不分離が言われていたのだととらえることができるのではないだろうか。

再び、先輩保育者から

こうして、再び自身自身の幼稚園教諭時代を振り返る時、脳裏に浮かぶある保育者の姿がある。現在も現役で経験年数を重ね続けているその保育者は、決して元気に華やかに目立つ保育を行う訳ではないが、温かく穏やかな雰囲気はクラスの子どもたちを、安心し落ち着かせ、そして見事に一人ひとりに行き届いたていねいさと「まめやかさ」を体現していて、未熟な自分にとっては憧れであった。子どもたちの遊びがどんなに雑然と定まらないような条件の日で

も、あるいはどんなに遊びが大々的に広がっている時でも、保育室が物であふれていっぱいになるといふことがないのが不思議であった。それでいて保育中は、子どもたちの目の前でかいかいしく動き回っている印象がないのである。

そしてある日の保育後。夕方の日差しが入る保育室のロッカーの前で、子どもたちが残っていた作品を一つひとつ手にとって眺めながら、明らかにそれぞれの子どもと対話している光景を見た。私にしても、ロッカーの棚を雑巾で拭き、作品を整理し、並べ直すことはしていたが、忙しく流れる保育後の時間の中では、当時、このような心のゆとりも細やかな観察もなおざりになっていたことにハッとさせられた感覚を、いまでもはっきりと覚えている。そして、「行き届く」とは実際的にこまごまと立ち働くことばかりではなく、このように子ども一人ひとりへ心を向ける時間をていねいに積み重ねていくことでもあるのだと学んだ。だからこそ、この先輩保育

者のクラスの眼に見える実際の姿があったのである。

「まめやかさ」について考えながら、何人かの先輩保育者のことを思い出してきたが、保育の場であれ、同僚の何とありがたいことであつたかといまさらながら気づかされた。そして、教育的営みとしての保育が、人である保育者に支えられていることを改めて考えさせられた。

(田園調布学園大学講師)

注

- 1 津守真『子ども学のはじまり』フレーベル館 一九七九年
- 2 倉橋惣三文庫3『育ての心(上)』フレーベル館 二〇〇八年
- 3 倉橋惣三『幼稚園雑草(上)』フレーベル館 二〇〇八年
- 4 フレーベル『人間の教育』有斐閣新書 一九七九年
- 5 厚生労働省『保育所保育指針 解説書』 二〇〇八年